

山口未桜著『禁忌の子』

(東京創元社)



ある日兵庫市民病院で働く救急医である武田の元に搬送されてきた溺死体は、武田に瓜二つだった。なぜ彼は死んだのか。なぜ瓜二つの顔をしているのか。『禁忌の子』はそれを解き明かしていく医療ミステリーだ。

著者の山口未桜は現役の医師でもある。ミステリーにつきものの、遺体が発見される場面の描き方はとても生き生きとしていて、他の作家の追隨を許さない。この作品で第三十四回鮎川哲也賞を受賞し、デビュー。本屋大賞にもノミネートされた。

自身の強みを生かした作品作りの大切さを改めて思い知った。臨床の現場にいる山口は、ミステリーの核である謎解きだけでなく遺体発見の現場の描写、殺害方法といったものをどこまでもリアルに描く能力を持っている。これが医学部にいた間の約十年の執筆のブランクを挟んでいるというのだから驚きである。

今年八月には第二作目となる『白魔の檻』も刊行されている。期待せずにはいられない。

(伊藤 祐楓)

陶芸家ルーシー・リー展―東西をつなぐ優美のうつわ―

(国立工芸館)



イギリスの陶芸家ルーシー・リーの大回顧展が、金沢の国立工芸館で開催された。近年、陶芸を始めた私にとって、ルーシー・リーは憧れの作家の一人。彼女の鉢や碗は薄造りで繊細で、白や薄桃色など淡いマットな質感が特徴的だ。また、電気窯で素焼きと本焼きを一度に行うという現代的なスタイルも、私にとっては新鮮だった。

展覧会で心に残ったエピソードがある。渡英したリーが、尊敬するバーナード・リーチに会い、自作を見せたところ「薄すぎる。人間味が感じられない」と批判され、ショックを受けた。その後しばらくは、リーチや濱田庄司ら民藝運動の作家たちのような厚みと柔らかさのある作風を目指した。だが、若き盟友となる青年ハンス・コパーに励まされ、再び本来の自分のスタイルを取り戻す。やがてファッション界の三宅一生に見いだされ、人気を得ていったという話だ。世代の異なる友人や、まったく別分野の創作者が、時にその人の価値を見つけてくれるキーパーソンになるのだと、鑑賞しつつ改めてしみじみ感じた。

(岩館澄江)